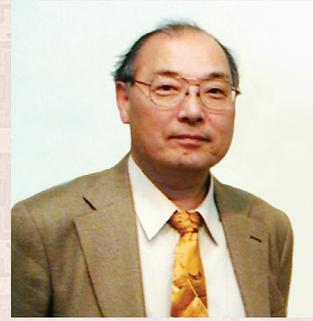


科学よもやま話

第8回 船と機能美



佐藤勝昭

今月のスケッチは南仏マルセイユの旧港(Vieux Porte)の風景です。海から数キロ離れた高台にある国鉄の駅からこの場所に来るには地下鉄を利用します。旧港駅のエスカレータを上り詰めたとたん、眼前に広がるのがこの風景です。

マルセイユは地中海を望む南仏最大の港町であり、フランス最古の都市です。その礎は、紀元前600年頃ギリシアのフォカイア人が築いた植民都市マッシリアに遡るといわれます。

旧港は湾内にあり、北側のサンジャン要塞と南側のサンニコラ要塞にはさまれた狭い水路で地中海につながる良港です。マルセイユはこの港に恵まれ古くから商都として栄えました。モロッコなど北アフリカの旧植民地との交易港としても重要です。今では貿易の機能は湾外の新港



ビューポルト(旧港)の朝(マルセイユ) 佐藤 画

に移り、旧港は、レジャー用の小型船舶の停留地となっており、遠景には描ききれないくらい多数のヨットやクルーザーなどが見られます。

私は、港や船を描くのが好きです。小さな漁船のイカ釣り船、魚市場で水揚げ中の漁船、造船所で建造中の大型船、浜辺に打ち上げられた廃船…。船が画家を惹き付けるのは、その機能美です。

機能美を追求しつづけたフランスの建築家ル・コルビュジェは、「海に浮かぶ船を身よ。…その船体の優雅な曲線を、丸から平面への穏やかな変化を、その竜骨の強さを、その船首の跳躍を、その帆柱と索具の対称性と豊かな網目細工を、威厳のある風の筋肉、帆を見よ。」と書きました*。船べりの優雅な曲線は、決してデザインのみから作り出されたものではなく、流体力学的な必然性をもっています。天に向かってすっと立つ帆柱は、風をはらんだ帆布が受ける力を支えるに十分な力学的な強度を保證しています。これらは長い歴史の中で築き挙げられてきた船大工たちの経験と技術によるものですが、豊かな美的センスがなければ機能美は生まれなかったでしょう。

最近の大型船舶、航空機、新幹線、車両などは流体力学にもとづいたコンピュータシミュレーションによって設計されています。その結果、ともすれば機能性を高めることに主眼がおかれ、無機的で無粋なものになってきました。高い性能を追求することも大切ですが、そこに美的要素を加えるセンスも必要ではないでしょうか。

(東京農工大学 副学長)

*ル・コルビュジェ：『建築をめざして』(吉阪隆正訳)